



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2019年6月7日発行 第14号

6月は梅雨のイメージが強いですが、快晴の日が続き心も晴れ晴れとなります。一方で、水不足が心配され、節水制限をされる地域もあるようです。極端な気候変動に今年も悩まされそうで心配な一面が残ります。

本アカデミーでは、順調に各講座も始まりました。今年度、最初の公演となる7月15日開催の「出雲フィルハーモニー交響楽団」の定期演奏会に向けての公募も順調に推移し、セミナーも含め、質のいい公演にすべく関係者の学ぶ姿勢が、良い相乗効果を生み出しているようです。

◎ 指導講師もしっかり学んでいます！

本アカデミーの組織には、①演奏を通して音楽芸術を提供する母体となっている「出雲フィルハーモニー」、②学術研究・指導者育成・音楽芸術支援を担う「音楽研究院」、③子供たちの育成・市民文化活動促進を行う「音楽院」が存在しています。

音楽研究院には、研究講座として「主位研究（音楽芸術表現法）」と「基礎研究（演奏法、器楽／声楽）」がありますが、今回は、「音楽研究院」の「主位研究」について触れてみたいと思います。

ところで、「主位研究」とはどのような研究かといいますと、音の響きと言葉の響きに重点を置いて、意味と内容、時代背景や形式を考察する研究です。昨年度は、◆特別主位研究講座（外部講師をお迎えしての理論と実践）、◆主位研究公開講座（平野一郎氏による連作交響神楽の学習会）、◆通常主位研究講座（中井芸術監督による勉強会）が実施されました。今年も「特別主位研究講座」が6月3日～4日にかけて、音楽学の“丸山桂介”氏をお迎えし、開催されました。この講座には、本アカデミー講師がたくさん受講し学んでいます。「実践」の場では、公開レッスンが行われ、声楽（テノール）、ピアノ、ヴァイオリン、フルート、クラリネット、ファゴットの指導講師が受講しました。指導講師の学ぶ姿勢こそ、演奏技術の向上は勿論、アカデミー生への指導にも生かされます。講師を通してより質の高い音楽表現を受講生の皆さんが身近で学ぶことができることは、本アカデミーならではのことと思います。

「理論」の場では、連続講義の1日目に「ミサ」と「キリスト教の成立」、「哲学者「シューベルト」について学びました。この講義を聴講して感じたことは、ヨーロッパで生まれたクラシック音楽の根

公開レッスンの様子



底には、宗教音楽の「ミサ」の存在が大きく影響していること、併せて当時の時代背景や人々の生活環境を調査しなければ、作曲家の意図する本当の曲想を知らずに演奏してしまうという大きな過ちを犯しかねないことが強く印象に残りました。ミサのテキストはルネサンス時代から近年（1960年代）まで、ほとんど変わっておらず、この間に著名な曲が多く作曲家によって生み出されていることも講義を聴講して気づかされました。このようなことから、作曲家にとってミサの存在がいかに大きかったことがヨーロッパ音楽を理解するのに役立つことを学びました。一方で、古代ギリシャの宇宙観に音楽と相通するものがあり、哲学者ソクラテスやプラトンの思想が数学者でもあるピタゴラスに波及し、教会建築のドーム状の箇所に宇宙観（善なるものと悪なるものの対立表）を表現し、その宇宙観が当時の古典派の作曲家に大きく影響していることが、講義からよく理解できました。また、少年時代に学んだ教科書を調査することで、シューベルトがどのような詩に影響を受けていたかを探ることが、彼の音楽を理解する近道であり、一番正確なことであるという、丸山氏の膨大な資料に感心し、頭が下がる思いでした。

講義内容は多岐にわたり、この紙面でまとめることは不可能ですが、楽曲を理解するには、何となくこうであるというあいまいな見解でなく、歴史的背景を探っていくことこそが、その楽曲のテンポ感であったり、本質に迫ることにつながるものとよく理解できました。まさに、「眼から鱗」とはこのことをいうのだという実感を得た次第です。

「理論」の連続講義には、夜間にもかかわらず本アカデミー生から指導講師、老若男女の多くの市民が駆けつけ、丸山氏の講義に耳を傾け、宇宙や世界をも揺るがす音楽の奥深さに、音楽と共に生きる勇気を改めていただいたように感じさせられました。

☆お知らせ！

「出雲の春音楽祭2019」Vol.2の様子が、月刊音楽雑誌「パイパーズ」誌7月号（6月20日発売）に掲載されることになりました。関西トランペット協会の元会長である“嶋田明”氏が公演の前日から来雲し、「出雲フィル」や「出雲芸術アカデミー」について詳細に取材された、その記事が載るのです…。パイパーズ誌は、管楽器専門誌ですが全国版なので多くの音楽ファンの皆様の目に触れることとなります。本アカデミーの様子が全国に発信されるわけですから今から楽しみです。皆さんも是非購入され、手に取ってお読みいただければ喜ばます。

7月号に先立って、6月号巻末の「編集子の雑談室」コーナーに、嶋田氏との対談をパイパーズ誌社長自らが予告として音楽祭の様子を執筆していただいています。その記事は、交流会館の出入り口付近に掲示してありますのでお読みください。



連続講義の様子

